

看護大通信

19



新潟県立看護大学

講師 山本淳子

今回は、児童英語教育

について考えてみます。日本では、公立小学校の九三%で英語教育が実施されていますが(文部科学省二〇〇六年調査)、大体的場合、その内容

はことばの習得というよりもゲームや歌が中心です。

小学校で英語を学ぼう

また回数も少なく、六年生の年間平均では十三、七時間足らずです。一方、小

池生夫氏の研究(二〇〇四)

によると、日本を除くアジア十三カ国・地域のほとんどの小学校では、英語は必修科目として週に二・三時間の割合で学習されて

います。使える英語を習得させようとするアジア諸国の意気込みが感じられま

す。

日本でも英語を必修科目にしようとする動きはあるのですが、国語や英語教育の専門家の一部から反対の声があがっています。

地域人材の活用
の推進などが検討されてい
ています。担任

の先生と専門家の協力体制で行われるのが理想的だと思われま

す。

主張二：小学校と中学校の連携が整備されてい

ない

一貫した英語教育のためには小・中の英語の指導者が十分話し合うべきでしょう。これまで小学校では

あまり行われていない英語の読み書きも、段階に応じて導入すべきかもしれません。

主張三：発達段階にある子どもが英語を学ぶことで、日本語習得に悪影響が出る

手の言うことをしっかりと聴く態度が身につくという意見もあります。私は、児童期に母語・外国語を同時に習得させることは海外の成功例をみても、可能であると考えます。

一般的に日本人は英語が苦手といわれますが、効果的な児童英語教育が、英語が得意な日本人の育成に結びつくことを期待しましょう。

参考文献 小池生夫(編) (二〇〇四)『第二言語習得研究の現在』大修館書店



児童英語の教材や指導書